

【②見方や考え方について－B:授業をつくる教師の視点】

■子どもの絵の見方、子どもの絵への願い

－あのこ、えはたのしいね－

造形作品や造形物の鑑賞と子どもの絵の見方は、似ているようで違う。

鑑賞は創造的再生産である。作者と同じように思考を巡らせ、ある意味で絵を描き上げるのと同じような発見や驚き、感動さえ手にすることがある。どのように絵が成り立っているのか、何が描かれているのか、何を意味するのかなど、深く考えることもある。

一方、「子どもの絵の見方」と言うときには、子どもの視点に立って、子どもを理解することが大切である。共感的な見方がポイントとなる。

子どもの絵に何を求めるか。時に、「よい絵」という言い方もするが、その反対に悪い絵があるのだろうか。こうあってほしい、こんな絵だったら、見るほうもうれしいということはある。それをまとめたのが、「あのこ、えはたのしいね」である。

あ…明るい絵、

の…のびのびした絵、

こ…子どもの声が聞こえる絵、

え…笑顔が描かれた絵・笑顔になる絵、

は…迫力のある絵、

た…楽しい絵、

の…のりのある絵、

し…真剣に描かれた絵、

い…一生懸命な（様子がかかれた）絵、

ね…年齢に即した絵・ねらいのはっきりした絵、などである。いかがだろうか。

このような絵は、その時だけでは描けない。豊かな体験や体験の振り返り、イメージのふくらませ方や基礎的・基本的な技能も必要である。日々の積み上げが欠かせない。前任校の長岡市立上組小学校では、「あのねノート」と称したスケッチブックを活用し、描くことの習慣化を図っている。

いけがみひでとし

(池上秀敏：新潟県上越市立稲田小学校校長)